

海事弁護士人生を歩み始めて

会員 青木 理生



海事弁護士の役割

トン数ベースで99%超、金額ベースでも約70%。これは、日本の貿易に占める海上貿易の割合だ。そして、物流・漁業を担う船舶に関する様々なトラブルを解決に導き、海運や漁業の発展・円滑化に貢献することが、私の勤務する海事事務所の役割である。

保険制度と海事弁護士

御存知のとおり、古来より、海上運送は、多額かつ大量の荷物の輸送手段であり、常に多大なリスクと隣り合わせであった。そのため、リスク分散のための諸制度がいち早く発達しており、その制度の最たるものの一つが保険制度である。したがって、海事弁護士の存在も、この保険制度なくしては語れないようである。そこで、海事事務所に籍を置く私も、保険制度を通じて得た経験を記載したいと思う。

ある船主さんとの出会い

とある調査のため、事務所の先輩と、ある船主さんを訪ねることになった。その船主さんは、オーナーでありながら、乗組員の人材不足や、折からの不況のせいかな、かなりの御高齢ではあったが、自ら船長として舵を取られていた。事務所の先輩によれば、こうしたケースは、特に珍しいわけではないという。海運は、景気に非常に左右されやすい敏感な世界である。実際、船内にお邪魔させてもらい、船内の状況などから、その船主さんが、厳しい経営状況の中、

かなり困難な生活を送られていることがまざまざと伝わってきた。

経済的な厳しさが伝わる船内とは対照的に、非常に丁寧に保守・保管されている設備類がとても印象に残った。とりわけ、レーダーと神棚、そして、丈夫そうな額に入れて壁にかけられていた保険証券がとても印象的であった。船主さんは、厳しい経営状況の中でも、保険料だけは欠かさずに支払い続けていた。

同行した事務所の先輩は、私に対して、「青木君、よく見ておくんだよ。私たちの報酬も、こうした船主さんたちのなけなしの保険料がもたになっているんだ。私たちは、常に謙抑的でなくてはならない。」と注意を促した。保険を介し、現場と繋がる海事弁護士の役割と責任をひしと意識し、身が引き締まる思いがした。

報酬と責任

学生の頃は、給料の源泉というものでなかなか思いを巡らすことはできなかった。しかし、弁護士となり、依頼者や関係者等様々な方にお会いし、上記したような現場に足を運び、報酬の「重み」を感じられるようになってきた。

レーダーと神棚、そして保険の存在は、船主さんが今日も明日も舵を握る心の支えとなっている。まだ歩み始めたばかりの海事弁護士人生ではあるが、常に、依頼者と船主さんの思いを忘れずに精進したいと思う。